

## 子どもたちのこと ①

大橋利恵子

世の中には実にいろいろな人間がいる。一人として同じ性格や同じ生活環境の人間はない。然るに子供を見る時になると、発達過程という名のもとに「子どもとは、このようなもの」という見方になってしまふのは、何故なのだろうか。大人一人一人が違うように子どもたつて一人一人個性もあれば、生活環境も違つてゐるはずである。

その個性をより的確に理解しようと保育者が思つた時、おのずとそこには限界が見えてくる。大人同士の間でもなかなか理解し合えないのだから、まして、保育者と子どもでは無理ないともいえる。しかし、それでもなお保育者がその子を一個人として大切に見守れるのなら、また、大人の「こうあるべき

だ」という勝手な尺度を捨てて、その子に向かえるのならば、そこには目に見えぬ力が働いてくるであろう。そして、そこに感情が行きかうのなら、なおさら、理屈ではない何ものかが生まれ、大人同士より、より豊かなものを感じられるはずである。

そんな幼児とのかかわりをしたいと願いながら、毎日の生活では悔むことやわからないことばかりである。でも、ともかく、その子の世界を計り知りたいと思う心に乗じて、私の周囲の子ども一人一人について語つてみたいと思う。それにより、より子どもと近くなれることを願つて……

### A男のこと（五才 男子）

例にならぶ時、身じたくをする時等、何か決めたように行動しなくてはならない時に、いつも遅くなる子はだいたい同じである。その中に必ず入っているのがA男である。どうしてかなと思つて様子を見ると、

例えば、朝、制服に制帽で登園して来るので、そ

れをロッカーに掛けたという仕事がある。A男はパンをかけるとすぐに友だちの所へ行きおしゃべりをしてくる。そして、しばらくして、帽子を置くと、次に既に遊び始めている子どもの所へ行き入りこむ。そして少し経つとおもむろに制服を脱ぎ掛けに行くのである。やつてできないのではないけれどなかなか自分でさつきとやらないのである。

母親に、家庭での様子を聞くと、兄、第二人の下の子なのでついついやつてあげることが多いとの返事に「さもあらん」とうなずける。それでもそういう子どもはよくいるもので、大抵、根気には声をかけていると、いつのまにか出来るようになつてくるものである。A男の場合、言われても言われても、相変わらずの所があり、腹が立つやら困るやら……「制服のまま遊ばない方がよい」と言うのをやめてしまえばそれでいいわけなのだけれど、「年長の二学期にもなつて」と思うと、いつのまにか頭に血がのぼってしまっているわけである。

そんなA男だから、友だちに対してはやさしい面

も持つてゐる。なかなか一人でいろいろなことができない女兒の手伝いをしてやつたり、泣いている子の所に行って声をかけたりしている姿をよく見る。また、人を笑わすことが好きで、おもしろいことを言つてはよく自分も笑つてゐる。

先日も、じゅず玉、どんぐり、短かく切つた色付きストローなどを糸に通して、思い思いの首かざりを作つていた。教師も一緒に考えて、中央にどんぐりが三コくるように、じゅず玉、ストロー等を配置して首かざりを作つていた。きれいにできたので、首にあてながらみんなに見せて「にこ」と声を発した。とたん、A男が中央に入れたどんぐりを指さしながら「さんこ」とさけんだのである。一瞬、静かになり、後は大わらい。本人はただ、にこにこしてゐるのである。この性格の明るさが、毎日くりかえし注意されても平氣でいられるゆえんなのかなと思つたりする。いづれにせよ、こちらの都合をあまり押しつけず、A男のやさしさや明るさを伸ばしていくかな

くてはならないと心する次第である。(岐阜北幼稚園)